
ミニ物語～旅～

凧夜 流歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミニ物語〜旅〜

【Nコード】

N4207J

【作者名】

風夜 流歌

【あらすじ】

ある村から旅を始めることになったカルム・アンバーとジャット・ブラック。その目的は、カルムの『記憶探し』だった……。

新しく仲間になった竜の生まれ変わりとされているヴァルシア一族のジェイド。

旅の理由は『親探し』。

これからの旅、無事に進むのか……？

1、カルムとジャット

デインクスという小さな村の中を歩く一人の男の子がいた。

大人びていて少年ではないが、しかし青年とよぶには幼さが残るその顔は肌が白く、透き通った深い海の色の瞳。背中まである琥珀の髪は頭の上で結わえられていた。

年は・・・一七、一八といったところか。背は一七五ほどあり、細身だがけして華奢ではない。

「カルム！カルム・アンバー！」

後ろで人の声がする。

カルムと呼ばれた男の子は長い髪を揺らしながらゆっくりと振り返った。そこには、短髪の黒髪に漆黒の瞳、身長はゆうに一八〇を越えているであろう青年がいた。

ジャット・ブラック。

それが彼の名前だ。

年は、確か一九だったか・・・。

体つきはカルムとは違いがっしりしていて頼り気がある。

「やあ、ジャンおはよう」

のんびりとした声音にズンズンと歩み寄ったジャットが握り拳を空へ向かって振り上げたかと思うとおもいきりカルムの頭へ振り下ろした。

「つつたあ！何するんだよ！」

「うるせ！お前今日が『旅立ちの日』なんだろう！こんな所でんびりとうろろしてるから渴を入れてやったんだよ！」

「だからって殴らなくても・・・」

「ぐちぐち言うな！準備はしたんだろうな？」

「してるよ。あとは食料だけだから保存食を買いに行こうとしてたんだ」

なのに殴るんだもんな・・・。とまた呟くと、ジャットにもう一発

くらわされた・・・。

「おや、カルム！お前今日旅立つのかい？どうしてまた・・・」
食べ物屋に行くのと店のおばちゃんが話しかけてきた。

この村の人達は皆気さくで良い人ばかりだ。

「ああ、『探し物』があるんだ。それを探しに」

「そうかいそうかい。淋しくなるねえ」

この時代、旅に出るものは少なくなかった。

世界が見たいというものもあればいろんな人に触れ合いたいという人もいる。

カルムが一人で旅立つのが心配、と言って今回の旅に付いて来るジャットも世界が見たい、の一人だ。

だが、カルムが旅に出るのは別の理由。

それは『あるモノを探す』こと。

その『あるモノ』とは自分自身の、記憶。

カルムは生まれてから十と二、三年過ぎた頃にこの村に来るまで、どこにいたのか、誰と話していたか、そしてどういう経路をたどってこの村に着いたか、すべて覚えていなかった。

唯一覚えていたのは、名前だけ。

だから知リたかった、この村に来るまでの10年と少し、いったいどこで何をしていたのか・・・。

店のおばちゃんにお金を払い、先に出ていたジャットを追って外へ出た。

1、カルムとジャット（後書き）

初ファンタジー!!!

初心者なので生温かく見守ってください

2、旅立ち

「いよいよだな」

村の入り口へ立ったジャットは隣に立つ旅仲間に告げた。

「そうだね」

果てしない道の先をまぶしそうに見ながらカルムが言った。

「やっとこの日が来た」

この日をどんなに待ち望んだことか・・・。

「行こう！」

カルムの言葉を合図に二人は勢いよく外へ飛び出した。

「カルム、まずどこへ行くんだ？」

村を出て一時間、ジャットが暇そうに聞いてきた。

「そうだな。まずは隣のレントンに行こう。行ったことがあるなら何か思い出せるはずだから」

「レントンか・・・。あそこはでかい街だからな・・・ん、でもあそこ遠くなかったか？歩いて何時間かかるんだよ」

「えっと、地図を見ると・・・結構離れてるから、早くても2日はかかるな」

カルムは村で買った地図を広げながらさらっと言った。

「2日あ！？まじかよ」

思ったより時間がかかることを知ったジャットはガーン！という重い効果音を響かせながら道にへたり込んだ。

「何してんだよ。そんなとこに沈んでないでさっさと行こうよ」

「カルムお前・・・2日だぞ？旅立ってまだ一時間しかたってないのに・・・ほかもって近いとこないのかよ」

「近いとこ・・・ったってなあ・・・」

困ったなあ、と地図を広げ地面に座り込んだカルムの隣に座り込み、

地図を覗き込んだジャットはいきなり声を上げた。

「あー！ここ！こっちのが近いぜ」

ジャットが指さすのはディンクスの村より少し大きな村。

場所は・・・早く付けば夕方には着けるかもしれない。

「バシカか・・・でもここ治安が悪いって聞いたよ」

「野宿よりましだろ！ここにしよう」

「・・・わかった」

カルムの了解の言葉を聞いたとたんジャットは意気揚々と立ち上がり歩きだした。

「さあ行くぞ！カルム」

「あ、ジャン！そっち逆」

「・・・え」

地図の読めないジャットは別の方向に向かって歩いていたのだった・

・。

2、旅立ち（後書き）

やっと旅立ちましたねこの人たち
W
W
W
W
W
この先どうなる事やら・・・。

3、新しい仲間（前書き）

やっと出てきたよ！！！！！！

3、新しい仲間

「ここが、バシカか…」

「…そうみたいだね」

村の入り口に立った二人は物珍しそうに周りを見渡した。

廃屋と化した家々。

店はほとんどシャッターが閉まっている。

壁にもたれて座り込んでる人もいれば、地面に倒れ込んでる人もいる。

ガラガラ！

宿探して村を見回っていた二人の耳に何かが崩れたような大きな物音がした。

急いで音の方に駆け寄ってみると、ガタイの良いお兄さん達が5、6人何かを囲んでいるように立っていた。

その中心にいたのは、カルムと同じくらいの年の女の子。

瞳の色は綺麗な翡翠色、肌が白く、長く柔らかそうな髪は見方によつては金色に輝く薄い茶色で、耳が…尖っている。

さっきの大きな音はあの子が倒れたときに小さな箱の山に当たって箱が崩れた音だったらしい。

ちらっと見えただけだがどうやら傷をおっているらしい。

「なにあれ…カツアゲ？」

ジャットが眉をひそめて聞いた。

「…ちよっと、違うみたいだ」

耳を澄ませて彼らの話を聞いていると、「ヴァルシア」だの「売る」だの聞こえてくる。

「ジャット、ヴァルシアって知ってるか？」

「ん？ ああ、竜の生まれ変わりだっていう幻の一族だろ？ でもあの一族、ずいぶん前に滅んだって聞いたぜ」

「…だよなあ…」

まあいいや、と小さく呟くとカルムはタタタと男達の元へ軽やかに向かっていった。

「あ、おい！カルム！関わるなって」

ジャットの呼び止める声も聞かず男達の所へ付いたカルムは「こんにちは」とにこやかに話しかけた。

いきなり来た少年に驚いたのは紛れもなく男達で、しばらく口をパクパクと金魚のように動かしていた。

「な、なんだてめえ！！」

やっと立ち直った男が叫んだ。

この人が、頭だろうか…？

「その子、どうするんです？」

崩すことのない天使の笑顔は、男達にとっては悪魔の微笑みに等しい。

「つせえ！てめえには関係ねえだろ！ガキは黙って見てろ！この女顔が！！」

女顔。その言葉を聞いて顔をひきつらせたのは少しずつこっちに向かってきていたジャットで…。

「…んな、がお…」

言われた当の本人は黒いオーラを漂わせながら「おんながお」とブツブツ呟いている。

その異様な気配に男達はたじろいだ。

「：誰が、女顔：だって…？」

「う、うぎゃああああ！！！？？」

あまりの迫力に動くことが出来なかった男達は数秒後には屍の山と化していた。

「大丈夫？」

少女を見据えにつこりと話しかけたその早業に、女の子は目を見開き、ジャットは頭を抱えた。

「キミ、ヴァルシア一族の生き残りだね？その耳と髪の色が何より

の証拠だ。まあ実際のヴァルシア一族は金髪らしいけど」

いきなりのカルムの発言に少女はビクツと肩を震わせ二人を睨んだ。
「大丈夫。俺達はさっきのおじさん達みたいに君を捕まえる気なんかないから」

カルムはへらっと笑って女の子の前にしゃがみこんで目線を合わせ、優しく話しかけた。

「ただ、こんな所に女の子一人で何してるのかな？って思って」
しばらく見つめ合っていた二人だったが、女の子の方が先に根負けしてしぶしぶ話してくれた。

「……人を探してるの……」

「人を？」

「そう……。私、親がいないの……捨てられたんだ、って拾ってくれたおじいさんから聞いたわ。私……どうしても親に会って聞きたいの。なんで捨てたの？って……。まあ、どうせろくでもない理由なんだろうけど」

女の子は最初こそしんみりと話していたが、途中から腹立たしくなってきたのか声が低くなってきたて正直怖い。

「じゃあ一人で旅してんのか？無謀だな」

今まで聞いていただけだったジャットが話しに割り込んできた。

「仕方ないでしょ！他に頼る人がいなかったのよ！」

その言い方が気に入らなかったらしく、女の子はジャットをキッと睨んで言い返した。

「でも、女の子一人は危ないよ」

まあまあとカルムは諭すように二人の間に入った。

「そうなのよね。……あ、良いことを思いついたわ！！」

「「え」」

いきなり立ち上がり服に付いた砂も払わずに詰め寄ってきた女の子に男二人は思わず一歩下がった。

「見たところあなた達も旅をしてるんでしょ？なら私も一緒に行くっていうのはどうかしら！私もいろんな所へ行けるし、ちょうど旅

仲間も欲しかったの！ねえ！良いでしょ？」

「：いや、それ得するのお前だけじゃん」

「それに女の子がついさっき会ったばかりの男二人と旅なんて危ないよ」

あまりの迫力に気圧されてしまった二人は一瞬反応が送れてしまった。

しかもカルムは心配するところが少しずれている。

「もうこれは決定事項よ！文句言わない！」

対して女の子はもう決めてしまった、と反論は許さないと言い張る。どんなに言っても諦めてくれない女の子を前に先に折れたのは男二人。

互いの顔を見合わせたため息を付いたのだった。

3、新しい仲間（後書き）

次回女の子の名前が決まります
W
W
W
W
W

4、ジェイド

「まずは自己紹介ね！じゃあ・・・あなたから！」

と、指をさされたのはカルム。

「え、おれ！？・・・え、えっと、カルム・アンバー。年は、十七・かな」

「ふうん。同じ年か・・・。じゃあアンタは？」

と、なんとも興味なさそうに聞かれたのはジャット。

その態度に少しムツとしたジャットだったが気にせず自己紹介をした。

「俺はジャット・ブラック！漆黑っていう意味なんだカッケェだろ！年は十九だ！」

「へえ、確かにカッコイイ名前ね。それに比べて本人は全くカッコ良くないのね。名前に負けるだなんて・・・プツ」

「なっ・・・何だとお！！」

わざとらしく笑ってみせた女の子に対しジャットは本気で怒っている。

ほおっておくと殴りかけないのでカルムはまあまあ、とあやしつけた。

「・・・お前は、何ていうんだよ。名前」

やっとこさ静まったジャットはいつまでも自己紹介をしようとしないう女の子にしびれを切らし聞いた。

「私は・・・・・・無いわ」

「は？」

待っていた答えと大幅に違った女の子の言葉は、ひどく小さかった。

「私、名前ないの・・・。付けてくれる人いなかったから・・・」

しゅん、と俯いてしまった女の子を前にしてどうしていいかわからないジャットは本気で困っているようだ。

「そっか……。それは困ったな。一緒に旅をするんなら名前が無いと不便だし……」

んゝ、としばらく悩んでいたカルムは「あ」と声をあげた。

「そうだ、オレらと旅する間だけ仮で名前を付けるってのはどう？」

「え」

まるで猫や犬に名前を付けるというように軽く言ったカルムに百八重？以上ある男の子と百六十？と少ししかない女の子が声を合わせて驚いた。

「……なんか良い名前でもあるのか？」

「んゝ……良い名前ねえ」

ジャットの問いに小さく答えながら、カルムは女の子をじいゝっと見たかと思うと「あ、そうだ」と指を立てた。

「『ジェイド』ってどう？」

「ジェイド。翡翠か……。ずいぶんとしゃれた名前だな」

「……ジェイド……」

「だめ……かな？」

俯いたままの女の子の反応を見て不安になったカルムは恐る恐る聞いてみた。

「ううん……。すっごく良い名前！気に入った！ありがとうカルム」
バツと顔を上げ、満面の笑みでジェイドはカルムの手を握った。

その目には、うっすら涙が浮かんでいたがカルムは見ないふりをした。

「じゃあ決まりだね。よろしくね！ジェイド！」

「うん！」

手を握ったまま背後にキラキラとしたものを飛ばしている二人を隣で見ていたジャットは面白くなさそうに見ていた。

4、ジェイド（後書き）

W やつと出せたぜ！ジェイドさん＞＜。ああ、長かった！！！！
W
W
W

早いけど一休み〜簡単なキャラ紹介〜（前書き）

綴り間違っていたら言ってください・・・。

早いけど一休み！簡単なキャラ紹介！

【登場人物一覧】

カルム アンバー

(Calm Amber)

主題…記憶探しの旅

17歳。175cm。茶髪、長髪。海色の瞳。

カルムは穏やか、アンバーは琥珀という意味。

おっとりした性格で仲間思い。ちょい天然。

ジャットと共に記憶探しの旅に出る。

器用でなんでも出来る。

得意なのは剣術。

ジェイド ヴァルシア

(Jade Varcia)

主題…親探しの旅

17歳。163cm。黄土色の髪だが見え方によっては金髪にも見える、長髪。翡翠色の瞳。耳が尖がっている。強気で負けず嫌い。

初めは一人で旅をしていたが、おっさん達におそわれているところをカルム達に助けられ「こいつらとなら安全」と考え一緒に旅をすることにした。

カルムの事は尊敬しているが、助けてくれなかったジャットの事はキライでいつも突っかかっている。

竜の生まれ変わりとされているヴァルシア一族の末裔。

ジャット ブラック (ジャン)

(Jet Black)

主題？..世界が見たい

19歳。188cm。黒髪。黒瞳。

Jet blackは漆黒という意味。

カルムと共に旅を始める。

腕っ節は強いがたまに口が悪い。

考えるより先に手が出る突進型。

【国の名前一覧】

ヴァルバジア

10個の国からなる世界。

その中での中心にあるセントラル国に国王がいる。

この世界の国はセントラルを中心に点在している。

王妃は世界同士の和解のために嫁いできた。

ビルクロム国

周りからすると小さい国。ディンクスの村があるのもここ。

他国に戦争をふっかけようと関係の無い人達に兵器を作らせている。

ディンクスの村

カルムとジャットの出発地点。ジャットの生まれ故郷。

ビルクロムには珍しくないごく小さな村。

レントンの街

ビルクロムには大きな街が五つあるがレントンはその中で一番小さな街。

デカイことにはデカイ。

バシカの村

治安の悪い村。

ここでジェイドに会う。

ジャルズンワーク

世界名。

ヴァルジアの隣の15カ国もあるでかい世界。

和解のためにジャルズンワークの王妃がヴァルバジアに嫁いできた。

【世界観】

4つの世界からなる『世界』？の物語。

一つ一つの世界に国があり、その国一つ一つに村や町がある。

一つの世界を守るのが王様。

その世界の一つがヴァルバジア。

規模はでかいがそれだけの話。

【関係ない無駄話】

アクセス数がいつの間にもやら2000を超えていて感劇!!!!!!!!!!

初めてのファンタジー物なのでドキドキしながら載せていますww

ww

評価はもらえていませんが、感想とかを書いてくださると作者が大泣きしますwwww

ではこの辺でゝゝ(▽)ノシ

早いけど一休み〜簡単なキャラ紹介〜（後書き）

国の設定が変わったので書きなおします。

今後書きなおし&書き加えがあると思いますのでよろです^^

5、理由

夜が明けた。

バシカの村の使われていない店の一角で夜を過ごしたカルムとジャットとジェイドの三人は机に広げた地図を囲んでいた。

なぜ宿に泊まらなかったのかって？ 答えは簡単。「手持ちの金で泊まれる宿が無かったから」だ。

「で？どこに行くの？」

地図を一通り見終わり、顔を上げジェイドはカルムに聞いた。

「うん。まずは食料調達の為にレントンに行こう。ここからなら張りや夜には付けるかもしれない」

「あら。あなた達昨日旅に出たばかりなんでしょ？もう食料がないの？」

率直な回答に疑問な点を覚えたジェイドはカルムに聞いた。

「思わぬ事態が起きたんだよ。誰かさんが食料を持っていなかったから元々二人分の食料を三人で分けたんだ。しかもその誰かさんは大食いだし。無理もないだろ」

ジェイドの問いに答えたのはジャット。

そのトゲのある言い方に怒りを覚えたジェイドは微笑みながら思いつきり床を殴った。

「何か・・・言ったかしら・・・？」

殴られた床は見事に凹んでいる。

「・・・い、イエ何も・・・」

それを見て一瞬で顔が真っ青になってしまったジャットに比べカルムは二人の様子に笑いをこらえていた。

「さあ、出発よ！」

日のあまりの高くならないうちに出ようということになった三人は
レントンに向かうべくバシカを後にした。

「ねえ、なんで二人は旅を始めたの？」

バシカを出て数分、いきなりジェイドが聞いてきた。

「俺は世界がどれだけ大きいのかを見たくてカルムに付いてきたんだ」

先に答えたジャットの目はキラキラと輝いている。

「へえ、単純な理由ね」

ジェイドのどうでもいいような物言いにジャットは腹を立てるが、
当のジェイドは聞いていない。

「ねえ、カルムはなんで旅に出たの？」

「・・・俺は・・・探しモノがあるんだ」

「探しモノ？何か無くしたの？」

「うん。オレ、今まで住んでいたディンクスっていう村に来るまでの記憶が無いんだ」

「じゃあ、探しモノって・・・記憶・・・？」

「そう。見つかるかわかんないけど。知りたいんだ、今まで何をしていたのかとか、何で記憶を失ったのかを」

カルムの深い海色の瞳に、一瞬だけ光が宿った。

「・・・そっか・・・。じゃあ私と似たようなもんね。頑張りましたよ！」

そう言ったジャットの顔は、笑っているにも関わらず少し暗い雰囲気
を漂わせているように感じる。

「・・・うん。頑張ろうね」

それを気にすることもなくカルムはニコッと笑って返した。

5、理由（後書き）

続かなあああああい！！！！！！
まだ続き書いてません・・・；；

6、けんか

「広いねえ」

キレイな建物が並ぶ大通りを三人は歩いていた。

夜にもかかわらず街中には人が溢れかえりしよっちゅう人にぶつかっては謝ってを繰り返した。

「んじゃ、自由時間にしようか。集合時間は三時間後の十時な。夕食は各自で取ってね。集合場所は今日の宿だ」

と、カルムが指さしたのは十メートルほど先にあるさつき荷物を置いたばかりの小さなボロ宿屋。

それを確認したジャットとジェイドはコクンと頷いた。

「決まりだね。じゃ、解散！」

集合時間の三十分前、一番最初に宿屋に着いたのはジャットだった。ここレントンは確かに広い街だったが、元々やることがないジャットは暇ですぐに帰ってきてしまったのだった。

「・・・二人ともおっせえな」

たった二、三分たっただけなのに、暇すぎて死にそうだ。

こういう時、話し相手になってくれるカルムもちよつとムカつく女もいないとなると本当にやることがない。

仕方なく、ジャットは隣の部屋のジェイドと同室のカルムが帰ってくるまで寝ることにした。

ドアを開けると誰もいなかった。

ジェイドはシーンとした部屋の中を横切りベッドへと体を投げた。

・・・この街にも、親の手掛かりは無かった・・・。

はあ、とため息を付いて体を起こした。

隣の部屋は静かだ。

まだ帰ってきていないのかな・・・？

ジェイドは他にやることも無かったため、部屋を出て隣へと向かった。

宿に着いた。

「ジャットに荷物運び手伝ってもらえば良かった」

両手いっぱい紙袋を抱えたカルムは、えいほえいほと階段を上がり部屋へ向かった。

部屋も近くなってきたころ、カルム達の部屋から人の声が聞こえてきた。

明らかにジャットとジェイドの声だ。

「またケンカしてるのかな？」

少し苦笑いしながらカルムは部屋のドアを開けた。

「・・・」

カルムが部屋に入って最初に目にしたのは、ジャットとジェイドが物を投げ合っている場面。

投げている物は、枕やら布団やら椅子やら花瓶やら・・・。

部屋の中は嵐が通ったような荒れ具合だ。

「・・・何してんの？」

いまだにらみ合っている二人に、半ば呆れてカルムは声をかけた。

「何じゃねえよ！！カルム聞いてくれよ！こいつ俺が寝てる隙に物取ろうとしたんだぜ！？やっぱ信用ならねえ奴だったんだ！」

「カルム！誤解よ！私は一人で暇だったからこっちに來ただけなの！！」

肩で息をする二人に対し。

「・・・とりり敢えず、部屋を片付けて」

話しはそれから、とカルムは曇りのない笑顔で言った。
その笑顔に殺気を感じた二人はしぶしぶ部屋の大掃除を始めたの
だった。

6、けんか（後書き）

ぜんぜん進まない＞＜。
なぜだあ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4207j/>

ミニ物語～旅～

2010年10月9日21時59分発行